センター新刊書紹介

Rice Culture in Malaya. Symposium Series No. 1 ; Kyoto : The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 1965. iv+72 p.

本誌第2巻第3号に特集されたマラヤ稲作シンポジウム報告の英文版である。このシンポジウムは，わが国の熱帯稲作に関心を持つ人々の間にきわめて好評をえたと聞くが，その反響は国内のみに限られなかったようである。昨年，評者はタイ国に滞在したが，同国の稲作研究者間にも英文版報告書の刊行が待ち望まれていたものである。当然のことながら，この種のシンポジウムは欧文報告書の刊行によって，はじめて開催の意義をまっとうしうるものである。

和文報告がコロンボプラン・エキスパートと FAO 専門技術者全員19名のレポートを掲載したのに対して，本版では各パート毎の取りまとめを次の諸氏が行なっている。

マラヤにおける稲作と技術援助の概要 ……松島　省三
栽培に関する研究 ……杉本　勝男
品種改良 ……佐本　四郎
土壌と施肥に関する研究 ……三宅　正紀
害虫とその防除 ……川瀬　英爾
ネマトーダ ……国井　喜章
野ネズミの防除 ……望月　正己

あらためて通読してみて，一国の稲作の全般についてこれだけの内容ある研究成果をわずかの年月で行ないうるのは，日本人研究者を除いてはないであろうことを痛感させられる。各執筆者共，豊富なデータを短い頁数でまとめることの苦心がみられるが，それでも和文報告にもられたいくつかの貴重なデータが割愛されているのは残念である。しかし，仕事の性質上，全専門家が一貫したテーマに取りくんだ品種改良部門の報告は，Marinja や Masuri の育成経過が簡潔に理解できて，非常に興味深い。いずれにしても，本報告書は外国人，わけてもマラヤはもちろんのこと，東南アジア諸国の稲作研究者の間に多くの反響が期待される内容を含んでいる。

元来，マラヤの稲作には（他の農業部門もそうであるが），イギリス人の研究者が強いことが自他共に認められてきたが，本報告書や先にマラヤで発刊されて同国内で広く読まれている松島氏の *Theory and Technique of Rice Cultivation* などによって，少なくとも稲作研究部門には日本人研究者の発言がますます重みを加えることになると思われる。このことは今後マラヤの稲作の研究を本格的に始めようとしているわれわれにとって，何よりも有難いことになろう。

評者もこのシンポジウム開催に少しばかりお手伝いをした関係で，本書刊行までのいろいろないきさつを仄聞しているが，とにかく最後まで困難な共同作業をなしとげた農林省，OTCA，東南アジア研究センターの3主催者と，編集の実務を担当された京大川口研究室に敬意を表したいと思う。　（渡部　忠世）

Takashi Sato. *Field Crops in Thailand.* Reports on Research in Southeast Asia, Natural Science Series N-1 ; Kyoto : The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University, 1966. xi+148p.

本書は京都大学東南アジア研究センターにより企画遂行された諸研究のうち，自然科学部門の研究報告書シリーズの第1号として出版されたものである。

著者，兵庫農科大学教授佐藤孝氏の熱帯諸地域の農業研究に関する経験は，戦時中のインドネシアにおける生活，1958年兵庫農科大学学術調査隊のメンバーとしてのカンボジア農業調査，また同国に設立された農業センター創設期の約2年間にわたるカンボジア農業研究・技術開発指導等，豊富である。本書は，東南アジア研究センターの研究プロジェクトのもとに企画されたタイ国における農業の研究のうち，主として畑作物を中心に実施された1963年10月から翌年1月までの現地調査の結果を，著者の熱帯農業に関する豊富な経験と研究にもとづいてまとめ上げられた労作である。

序章において自然的立地条件からみた熱帯農業の優位性を説いたあと，タイ国は，東南アジア地域においては例外的に植民地化された経験をもたないため，その農民の労働意欲・平均的栽培技術は同地域の他の国